

子どもにも冒険をさせる

親が子どもを愛し過ぎるということはあるのでしょうか。いくら可愛いからといって、親が子どものためにしてあげる、全てのこと益になるとは限りません。

多くの親たちは、あまりにも子ども中心に全てを考え、過保護になりがちです。

「子どもだけが楽しみなんです」と話す、かなり神経質なお母さんと、話したことがあります。長い夏休みの間も、彼女は三人の娘たちが庭で遊ぶのを、家の窓から見守ることくらいしか、しませんでした。娘たちが怪我でもないかと、心配でハラハラしていたのです。

彼女は毎日、子どもたちが外で遊ぶ間、窓からただひたすら、じつと

彼女たちを見張り続けました。

「可愛い子どもたちに、もしものことがあったら…」と、そればかりを心配していたのです。確かに病気や危険はいつ襲うか分かりませんが、過保護な両親にとっては、わずかな不安が何倍にも増幅されてしまうのです。

しかし、それでは、かえって子どもが迷惑です。子どもを育てて、彼らを守ることは親の役目ですが、自分の行動の責任を取らせ、その成熟度に合わせた冒険をさせることも、子どもたちにとって、また大切なことなのです。

空っぽの箱

子どもたちは私たち親に、実に大切なことを教えてくれることがあります。

ある父親の話です。ある年のクリスマスに、4歳の娘が高価な金色の包装紙で箱を包んで遊んでいるのを見て、きつく叱りつけました。

実はその子は、心を込めてクリスマスプレゼントを包んでいたのですが、父親はそんなことには気づきもしないで、真っ赤になって怒ってしまつたのです。翌朝、娘は、その箱を父親のところに持つて来て、

「これ、お父さんにあげる」とささやきました。

父親は、夕べ怒つた手前、ばつが悪かつたのですが、包みを開けるやいなや、また腹を立てました。

「お父さんに空っぽの箱をくれるなんて、いったい何を考えてるんだい」

しかし、娘は目に涙を浮かべて抗議しました。

「空っぽじゃないわ、お父さんのために、キスをいっぱい入れたいんだから。大好きっていう私の気持ちがいっぱい入ってるのよ」

父親は思わず娘を抱き寄せ、

「ごめんね、お父さんが悪かった」と謝りました。

この父親はその箱を今でも大切にしています。がっかりしたことがあると、その箱を持ち出して、キスを投げ入れてくれた可愛い娘のことを思い出すそうです。

私たち親は皆、子どもたちの純真な愛とキスが詰まった、目に見えない金色の箱をもらっているのだと思います。私自身、その箱は、今まで受け取った中でも一番大切にしている宝物です。

食べようとしない子

小さなお子さんを育てている方なら、子どもに食事をさせるのがどれほど大変なことを味わっておられるでしょう。「子どもが食べなくて困る」と嘆くお母さん方がたくさんいます。解決法の一つをご紹介します。

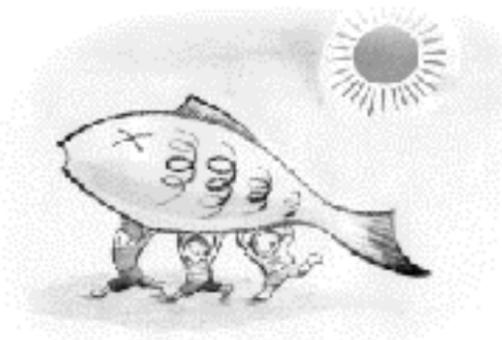
小さなお子さんがいれば、食卓はしばしば子どもと母親の根比べになってしまいます。しかし、もっといい方法があります。勝てる見込みはないのですから、初めから根比べなどしないことです。

「このキャベツがなくなるまで、ママは、ここから動かないからね」などと言ってみても、そう言った母親自身が、子どもが言うことを聞くとは信じていません。機嫌をとり、なだめすかしたり、「世界中には、

ご飯を毎日食べられない人たちが大勢いるのよ…」などと、お説教する必要ありません。美味しそうな食事を目の前に出して、食べようとしなければ、そのまま遊びに行かせるのです。きっと戻って来ます。

戻って来たら、冷蔵庫からさっきの食事を出して、温め、目の前に出してやります。遅かれ早かれ、食べずにはいられなくなりません。気をつけて欲しいことは、

食事の代わりに甘い物などお菓子をやらないことです。食べられるものがありながら餓死する子どもはいませんから、心配いりません。「空腹感」という素晴らしい生理現象が訪れるのを待ってください。そうすれば、食事の度にいらいらすることなく、穏やかに食事を楽しむことができるようになるでしょう。



近所の親同士の連携

近所の子どもが悪いことをしているのを見たら、どうしたらいいのでしょうか。

ひとつは、近所に住む親たちが、日頃からなるべくことばを交わす機会を作ることです。そうすると、子どもたちも、もつと仲良く遊べるようになります。

当然、そのためには努力が必要です。どんな母親でも、他人に自分の可愛い子どもを非難されたら、愉快ではありません。これは、とても微妙な問題です。ですから大抵の場合、子どもたちの振るまいに関して、親同士が話し合うことは、めったにありません。

しかし、子どもというのは、親同士が話をしていないのを見抜いて、

それをいいことに悪戯を続けます。ですから、お母さん、勇気を持って近所の親たちに、このように言わなければいけません。

「うちの子どもが外でどんなことをしているか是非教えてください。

弱い者いじめをしたり、大人に失礼なことを言ったりしたら、必ず教えてください。その代わり、私も何かあったら正直にお話ししますから、よろしくお願いします。」

子どもの評判が悪ければ、当然ながら、親は責められているように感じますが、完璧な子どもなど、どこにもいないのですから、耳を塞いでしまつてはいけません。親たちが、お互いに正直に話し合える雰囲気を作るなら、子どもたちへの指導の仕方も変わってくるはずです。

子どもの個性を大切に

折にふれて、多くの子どもたちの心に浮かぶ、一つの疑問があります。それは、「ボク（わたし）って一体なんなの。ボク（わたし）の居場所ってどこにあるの。」という疑問です。その答を導く手助けをするのが、私たち親のつとめです。

子どもの個性を伸ばし、アイデンティティーを確立するよい方法があります。その一つは、お子さんを単なる子どもの一人としてではなく、独立した人格として扱うことです。どんな子どもにも効果がある一つの方法は、お子さん一人一人の誕生日を、本人の自由な希望に合わせて計画することです。

また、お父さん、お母さんは、少なくとも月に一度は、子ども一人一

人と一対一で過ごす時間を持つのもいいでしょう。子どもに何かやりた
いことを選ばせて、親と一緒に遊びます。ボーリングやスケートをした
り、その子の好物を食べに行ったり、それは何でも良いのです。

ただ、気をつけて頂きたいのは、自然に会話が生じるような遊びを選
ぶことです。そういう目的なら方法はなんでも構いません。

繰り返しますが、何をやるにしても、家族のメンバーとしてよりも、
子ども自身の個性を十分に尊重した活動を計画することです。

自分は何が得意で何に適しているのかを、発見する手助けができれば、
子どもが恐れや不安にさいなまれて、余分なエネルギーを費やすことが
それだけ少なくなるはずですよ。

実力を出せない子ども

親が子どもについて頭を抱える一つの原因は、子どもたちがなかなか実力どおりの力を出せないことです。可能性は豊かなのに、やる気が起きない子です。「のん気な子どもにはこうしたらいい」という安易な解決方法はありませんが、ひとつのヒントは差し上げられると思います。

持って生まれた気質や、学習障害や、発達が遅れているなどの、難しい問題がからむ場合も確かにありますが、動機付けに欠けているだけという単純なケースが結構多いのです。

人間には、ついご褒美につられて、という現金な面があります。いくら努力しても何も見返りがないと、やる気も興味も失います。特に、子どもには、それが顕著です。だから苦勞して勉強する理由がわからない

子どもには、動機を与えてやると良いのです。

ところで、見返りは別に、お金や物である必要はありません。むしろ、物でないほうが

良いでしょう。やる気を出させるのに

有効な方法の一つは、子どもを褒め

て認めてあげることです。子ども

は、親に認められることが嬉しく、

心からの褒めことばを喜びます。親

から「よく頑張ったな」と言って欲しい

ために、どんなに嫌な勉強にも取り組める子ども

もたちがたくさんいるのです。

一方、この動機付けが欠けているだけで、持っている可能性をフルに生かせないという子どもたちも大勢いるのです。



故郷への旅

最近見たビデオで、太平洋にいる鮭の忍耐強さについて驚くべき事を知らされました。カリフォルニア州北部の孵化場で生まれた元気な鮭は、配水管を通って小川へ放流され、小川から広い川へ、そして川から太平洋へと進んで行きます。

海へとやってきた鮭は、それから何千キロもの道のりを旅していくこととなります。その後、まるで誰かに命令されているかのように、その鮭は、過酷な旅をしながら、また元の孵化場へと戻って来るのです。海から川への入り口を見つげるだけでなく、その鮭は同じ川、同じ小川を泳いで自分が孵化した同じ場所へと、迷うことなく戻ってくるのです。

更に驚くべきことは、鮭は小川に戻ってくるだけでなく、配水管の

中を泳ぎ、ついには配水管の先に付いている重い蓋を押し開けて、自分が生まれたタンクへと戻って来るのです。鮭のひれに付けた特別なしるしによって、その驚くべき旅の事実が判明しました。

私はそのビデオを見ながら、親が子どもに与える影響力の大きさを考えさせられました。

子どもたちは自分の育った環境に大きく影響され、家庭で味わった愛や聞いた教えによって一生の人格が形成されるのです。親として、震えるほどの責任を感じさせられる話です。

生き方は伝染する

日本には「子どもは、親の背中を見て育つ」ということわざがあります。子どもたちは、何気ない毎日の生活の中で、両親の物事に対する考え方や信念を吸収していきます。

ラテン・アメリカ系米国人として、最初にアリゾナ大学の学長となったマヌエルという方の話を聞いたことがあります。マヌエルさんは、ニューメキシコ州の貧しい農家で、12人兄弟の一人として生まれ育ちました。しかし、その貧しさを補うかのように、両親は彼をこよなく愛し、マヌエルさんは両親の生き方からじつくりと学びました。それが、後の成功に役立ちました。彼はこう言っています。

「私が7歳になった頃、母と私は牛を飼い始めました。毎朝4時に起

きて、牛の乳を絞り、それが済んでから学校へ行く用意をしたものです。何をやるにしても、やるからにはしっかりとやり通す、それがうちのモットーでした」

大学に入った彼は、授業料をアルバイトで稼ぎ出しました。

マヌエルさんの家庭の方針から学ぶことは多いですね。大切なのは、そういった生き方を、子どもたちに早いうちから身に付けさせることです。子どもたちは小さいながら、親のすることをしっかりと見ているのだということ、忘れないようにしたいものです。

愛するだけでは…

心から愛され、一人の人間として扱われていると感じた時、子どものセルフイメージは高まります。

しかし、愛されているとは感じてても「親は自分の意見を尊重してくれない」と感じる子どもたちがたくさんいます。

例えば、妻は酒浸りの夫を愛しているが、一方では軽蔑もしている。同じように、子どもは「お父さんもお母さんも、僕が自分の子どもだから可愛がってくれるけど、誇りに思ってくれてはいない。きっと僕にがっかりしてるんだ」と思い込んでしまうのです。

このように、愛情と軽蔑を同時に伝えるのは非常に簡単であることがお分かりになるでしょう。

子どもが話したすと固くなってしまふあなた、子どもの話しが終わらないうちに答えてしまふあなた、子どもが友だちの家に泊りに行く前に説教をするあなた、そして子どもの髪が乱れていると苛々しながら直すあなた。こういった行為は、子どもたちを心から信頼していない証拠です。

親子の愛情はプライベートなものです、自信や尊敬ということは他者との関わりの中で生じ、親の手の及ばないものです。親の愛情は、子どもに自信を持たせるための要素の半分に過ぎません。これから社会で受けるであろう屈辱に、立ち向かえる子どもを育てるためには、子どもを一人の人間として尊重するのはとても重要なことです。

違っている当たり前

.....

砂や雪の結晶もひとつずつ形が違うのですから、赤ちゃんは白紙で生まれてきて、環境がすべてを決めるなどと考えるのはナンセンスです。

子どもの学習スタイルを研究しているシンシア・トバイアスさんは、子どもには持つて生まれたユニークな学習スタイルがある、と主張します。トバイアスさんは、瓜二つの双子の母親ですが、「二人の息子をどうやって見分けるのか」と聞かれて、こう答えました。

「少しでも、息子たちの言うことを聞いてみてください。」

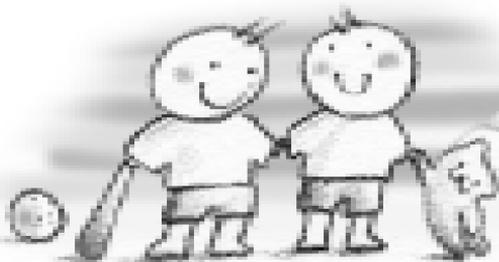
一分もすれば、兄弟の性格、気質、また行動パターンが、まるっきり違うことがわかります。遊び方も、まるで違います」

双子でさえそれほど違うなら、普通の兄弟や、血のつながらない人に

いたっては、もう皆さんお分かりでしょう。私たちは人間の人格の複雑さを、十分に認めてこなかったのではないのでしょうか。

実は私たち親は、子どもたちを比べては、自分がこうあるべきと考える型にはめ込もうとしがちです。

しかし、それでは子どもはたまりません。ですから「違っていて当たり前」と思ってください。この世に誕生するすべての子どもは、それぞれがユニークな個性を持って生まれて来るのです。



幼児のかんしゃく

.....

小さな子どもを育てた人なら誰でも、ひどい痲癩に手を焼いたことがおありでしょう。

普通は少しすれば収まりますが、いつもそうとは限りません。

ある家の3歳の男の子は、我がママが通らないと、床に転がり、泣き叫び、唾をはくという態度をとりました。親が何をしてもだめでした。ある晩、その子は何かして欲しかったのに、親がすぐに答えてくれなかったと言つて、また痲癩を起こしました。精魂尽き果てた両親は、もう、どうしていいか分からず、放っておきました。

男の子は無視されたのがショックで、まず母親のところへ行き、腕を揺さぶり、床に転がって大声を上げました。それでも反応がないと、父

親が読んでいる新聞を叩いて、同じことを何回も訴えました。

両親は、何もしないふりをしながら、実は息子のすることをじっと見ていたのです。

この男の子とは、何を隠そう幼い頃の私なのですが、両親に言わせると、私は自分の演技の馬鹿さ加減が分かったのか、それ以来、痲癩を起すのをピタリと止めたそうです。

お宅に同じようなお子さんがいたら、「わざと何もしない」という方法もあることを覚えておいてください。少なくとも、3歳の私には、それが見事にうまくいったのですから。